

School Nurse and School Counselor

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/656

養護教諭とスクールカウンセラー

—— 事例研究 ——

萱原 道春・木戸 陽子*

School Nurse and School Counselor : A Case Study

Michiharu KAYAHARA and Yoko KIDO*

I はじめに

筆者の一人である萱原は、平成〇年度文部省指定スクールカウンセラー活用調査研究校であるJ中学にスクールカウンセラーとして2年間勤務した。もう一人の筆者である木戸はその時のJ中学養護教諭である。萱原にとってはこれが初めてのスクールカウンセラー体験であり、木戸にとっては初めてカウンセラーと協働する体験となった。スクールカウンセラー活用調査研究は1995年に開始され、現在その研究結果を蓄積しつつある段階である。本研究はその一つとして位置づけたい。

ここに報告するのは、スクールカウンセラー萱原のコンサルテーションの元で養護教諭木戸がある男子生徒に対しておこなった教育相談の事例である。事例を報告する前に、スクールカウンセラーと養護教諭がこの2年間にどのような経験をしたのか、その概略をまとめておきたい。

(註：以下、自然な文章表現にするため、本論文の筆者は二人いるが、それぞれが適宜「わたし」という主語を使うことにする。)

スクールカウンセラーにとっての2年間

スクールカウンセラーは初めての経験であり、わたしは緊張しながらJ中学の門をくぐった。一方J中学もスクールカウンセラーを受け入れるのは初めてで、どのように進めていったらよいのか若干の戸惑いを感じている様子だっ

た。ともあれ、「お互い初めて同志、よろしくお願いします」ということでスタートが切られた。毎週1回水曜日の午後、わたしはJ中学に通いはじめた。

スクールカウンセラーとしての細かな活動方針はもっていなかったが、唯一「でしゃばって浮かないように」ということだけは当初から念頭に置いていた。なお、でしゃばるだけの自信ももっていなかった。「求められるに任せて動こう」というのが、わたしの基本姿勢だった。

活動を開始すると間もなく保護者からの相談を受けた。それは担任経由の相談ではなかったので、とくに担任と連絡を取り合うこともなく面接がつづけられた。また面接時刻も教師の帰った夜間が多く、面接場所こそ学校の中にあったが学校という組織の中で面接をしている実感はあまりなかった。いわば、学校からの委託仕事を校舎の一角をもらって黙々とこなしているといった様子だった。

しかし、そうしているうちにも、一部の教師から相談を受けるようになり、なかでも養護教諭とは毎回話し合う機会をもつようになった。養護教諭はJ中学教師の中でもっともカウンセリングについて勉強しており、またもっともスクールカウンセラーのコンサルテーションを求めていた。

養護教諭の居る保健室には様々な問題を抱えた生徒がいつもたくさん集まっていた。その生徒たちを抱えることだけでも大変だが、その努力が、養護教諭の伝え方の問題も加わって、他

の教師にじゅうぶん理解されているとはいえない状況があった。とくに非行傾向の生徒に対する対応をめぐるのは、「甘やかしてばかりでいいのか」「厳しい社会に出たときにやって行けるように鍛えるのが我々のしごとではないのか」といった批判が一部の教師から向けられていた。（註：非行傾向の生徒は一見積極的なので、内面の傷つき易さやしんどさが理解されず、このような批判は一般に生じやすい。）

養護教諭に対するコンサルテーションは、気がつく二人だけの関係には留まらなくなっていた。わたしに対してははっきりと反感を示す教師がいた。その教師は有能だが威圧感の強い人だった。ある時から突然に反感を示すようになったのである。何故なのか、その理由がわたしには初め分からなかったが、その教師が養護教諭のやり方を批判している一人であることが分かったとき、わたしは納得した。敵の味方は敵、ということである。もちろんそれだけが反感の理由ではなく、わたしはその教師から有能感をめぐるアンビバレンツな感情を向けられていることに気づいていた。しかし、わたしにはそれを受け止めるだけの度胸と力量がないので、わたしは最後までそれから身をかわしつつきた。

「でしゃばらない」「求められるに任せて動く」が、スクールカウンセラーであるわたしの基本姿勢であったことは既に述べた。具体的に言うとそれは「求めてくれる教師だけを相手にコンサルテーション活動をする」ということだった。その姿勢はこれまで自分がおこなってきた個人カウンセリングでの姿勢と通ずるものがある。またそれは特にわたし個人が強くもつ性癖でもあった。わたしは組織に働きかけるつもりはなかった。しかし気がつく、わたしは組織の人間関係の中に、全体に働きかける十分な力をもたないまま、一部の構成要素として存在していた。これが、初めてのスクールカウンセラー体験で得たもっとも重要な反省点である。現在わたしは2校目のスクールカウンセラーを体験しているが、基本姿勢をつぎのように定め

ている。「どの教師にもオープンに心を開いて、でしゃばらないよう気をつけながらも、積極的にコンサルタントとしての自分をセールスしていく」。これはわたしの目下の努力目標である。

J中学では、保護者に対する面接、教師に対するコンサルテーションのほか生徒に対する面接もおこなったが、それについては省略する。2年間の任期も最後に近づいたある日、最後の校内全体研修会が開かれた。その時ひとりの教師からつぎのような質問を受けた。「ほんとうに分らんから尋ねるのだが、受容ばかりで、果たしていいのか」。それは率直な質問だった。わたしも率直に問い返すことができた。「受容というのはそう簡単にできるものではない。指導という前に、本当の受容ができていいのか、いま一度振り返ってみてほしい」。これがはじめて全体に対して示したわたしの積極的な態度であった。

養護教諭にとっての2年間

スクールカウンセラーが本校に派遣されることが職員会で校長から報告されたとき、わたしの中にはカウンセラーに対する否定的な気持ちがあった。生徒とカウンセラーはどのような形でかかわっていくのだろうか。「親はスクールカウンセラーに話したいと思っていない。親は担任と話したい」という不登校生徒をもつ親の声があるように、必ずしも学校のニーズにあってはいる。また『学校臨床心理士のためのガイドライン』を読んで、スクールカウンセラーの役割の曖昧性にわたしは疑問を抱いていた。

そんな思いを抱いていた私がスクールカウンセラーに紹介されたのは突然であった。教育相談の係と校長がカウンセラーと打ち合わせをしているところに、事前に連絡を受けていなかったわたしが呼ばれた。この打ち合わせからカウンセラーと連携をとらなければならないという義務感を感じるようになったが、どう接していけばいいのかわたしは戸惑っていた。ある教師が「スクールカウンセラー派遣というシステム

には反対だが、個人を責めることはできない」というのを聞いて、やはり連携しなければという思いになっていたときに、カウンセラーの方から声をかけられた。

わたしは、生徒との関係で生じてくる迷いや感情、そして私自身の悩みもカウンセラーに話すことにした。さらに保健室の様子を見てもらい、カウンセラーと生徒の関係づくりを促した。他の職員に対してコンサルテーションを受けるよう薦めたりもした。わたしは生徒とのかかわりの中からカウンセリングの必要性を感じている。しかし他の職員の中にはカウンセリングを受け入れることにはかなりの抵抗もあったようである。とくに生徒指導として全体を動かす立場にある教師からすれば、一人一人の言い分を受け入れては全体としての動きがとれなくなるといった不安があったように思われる。

ある時、カウンセラーの勧めもあってわたしは校内全体研修会で一人の女子生徒の事例を報告することにした。それまで何回か学年単位で事例検討会が開かれたことはあるが、いつも『生徒に関する理解』だけにとどまっていた。しかしこの全体研修会は『教師と生徒の関係』をも見つめなおすといった内容であったために、教師たちは戸惑ったのではないかと思う。この研修会はわたしのしていることや考えを全体に向けて示したはじめての機会であったが、受け止められたという思いはあまり得られなかった。

2年目にはいるとカウンセラーはわたしにとってスーパーバイザー的存在になっていた。毎日の生徒との関わりやそのときの自分自身の感情を記録し、カウンセラーと話し合うことで頭の中が整理され、生徒の気持ちがより明確に見えるようになっていくことが実感された。また生徒と向かい合うことでわたしは自分自身の傷（葛藤）と向かい合いはじめた。はじめは怖くて必死に逃げていたけれど、少しずつ落ちついて自分と向き合えるようになっていった。

しかし担任との話し合いでは、連携をとろうと努力はするのだが結果は一方的な報告にしか

ならなかった。それには自分自身の葛藤が関わっていることがカウンセラーとの話し合いで何度かとり上げられ、わたしは努力を試みるのだが、当方の問題だけでなく相手方の態度もあって思うように進まなかった。わたしは何度か投げ出したい気持ちになった。そして理解されないうつらさをひしひしと感じていた。教師に理解されない生徒の気持ちと自分の気持ちがダブって感じられた。

そのような状況にいるとき、以下報告する事例のS男が事件をおこした。それをきっかけにわたしのやり方に対する不信感が表面化した。そのときはカウンセラーがわたしを援護してくれたが、この事件をとおしてわたしは他の教師との連携についてももう一度真剣に考え直した。教師のしんどさを分かろうとせず生徒と一緒に教師に向かって行っていたこと、人の援助・応援が必要なのにつっぱっていたこと、その裏返しとしての攻撃性などをわたしは自分自身に対して認めた。

スクールカウンセラーと協働したこの2年間で得たもっとも大きな収穫は、カウンセリングの技術や知識よりも、自分を知り自分を変えはじめたことである。

II 事 例

1 生徒と養護教諭のプロフィール

(1) 生徒 (S男) のプロフィール

学年・性 中学3年生・男子

臨床像 優等生といった雰囲気を受け答えがしっかりしているが、自分の感情を表にあらわさず淡々と話す。表情は固く、宙をみているような様子を見せるときがある。内にこもっている時は近寄りたがたい雰囲気を感じる。

家族

養父：親から見捨てられ幼少期を施設ですぐすという不幸な過去をもつ。若い頃は暴力団に憧れていたこともあるが、それはせず、地道に働いて現在の生活基盤をつくる。ただ、感情的

になるとすぐ暴力的になる面がある。

母：幼少期親から暴力的なしつけを受ける。ふだんは冷静であるが、ときどき感情をコントロールするのが難しくなり、子どもに対して暴力的なしつけをおこなう。

兄：S男といっしょに幼少期は施設にあずけられる。中学時代の3年間、養護教諭はこの兄とも関わりをもっていた。家で義父から暴力的なしつけを受けているため感情が不安定で、学校にくると柱に頭を何度もぶつけたり、独り言を言ったりすることがあった。身体症状を訴えてよく保健室に来ていた。

弟：母と義父の間に生まれる。母親自身が認めているように、S男と兄の二人にくらべ甘やかされて育つ。

生活暦

(幼少期) S男が2歳のころ両親が離婚した。事情があってS男と兄は施設にあずけられ、そこで約1年間すごした。寮母から苛められたつぎのような記憶をS男はもっている。「味噌汁の中のかぶが嫌いで吐いてしまったら、吐いたものまで食べろと言われた。食べないでいると殴られた。食事を残すと押し入れに入れられ、その時の暗い感覚が今でも残っている」。母親が新しい父親(現在の義父)と施設に迎えに来たときは、「やっと施設の生活から抜け出せる」と思い、義父のこともすぐにお父さんと呼んだ。「どんなに親から殴られても施設よりはましだった」とS男は言う。

(小学校) 母親は感情的になるとS男や兄によく暴力をふるった。S男は夏休みの宿題を提出してなくて殴られたことがある。その時S男は鼻血を出し、血を見た母親は急に態度を変えてS男に謝ってきた。その様子を見てS男は母親の不安定さに恐怖心をもったと言う。

学校ではクラスメートたちとうまく交流することができなかった。苛めもよく受けた。若い女性集団から性的ないたずらを受けたこともあると言う。S男は年下の子を苛めたり小動物を殺したりするようになっていった。

義父は学力に関心が強く兄とS男をよく比較した。成績のよくない兄に対して義父は食事の内容を変えるなどしてつらくあたたか。それにS男も加担させた。「兄貴を殴るように義父に命令されてよく殴った。そうしないと家には居られなかった」とS男は言う。義父は二人に対して「お前たちは、おまけ」と言ったり、二人が何か問題を起こすと「本当の父親の血筋だから」と言ったりした。そのような義父に対して母親は厳と抗議せず、S男は「母親は自分たちの側ではなく義父の側についている」と感じていた。

(中学校) 1年生の時、塾の先生からつけられたあだ名である『おかま』をある生徒から言われ、カッとなってガラスを割ったことがある。養護教諭はけがをしたS男を病院に連れていった。そこへ義父と母親が迎えに来た。「家に帰ったらどんな目に会うかわかっているだろうな」と言う父親に対し、「はい」と答えたS男の姿がとても印象的だった。

2年生も終わる頃、ある生徒の親からS男がナイフを持っているという情報が学校に入ってきた。「まじめな、おとなしい生徒でナイフを持っている生徒がいる。こんな生徒があぶない」と養護教諭は教頭から聞かされる。兄と関わったように、S男ともこれから関わることになるのではないかと養護教諭は予感する。

(2) 養護教諭のプロフィール

年齢・性 41歳・女性

臨床像 行動力がある。特に生徒の教育相談に関わる事柄では暴力団の組員と関わることを厭わない度胸もある。それは一所懸命さから生まれる度胸のようである。このように気が強い面があるのに加えて、うまく人に甘えられないため、同僚からは攻撃的にとられることがある。

このことは母親との関係が基盤になっていると自己分析している。自分の思いが母親に通じなかった時の虚しさ、孤独感、自己嫌悪感、生きていることの意味のなさといった感覚が記憶

の中にある。

教師歴 教師になって19年目。初めの10年間は小学校勤務、それから中学校勤務となる。中学校に勤務するようになってから生徒とのかかわりが多くなると同時に、生徒の内面の深さに触れる。そして「生徒の本音を聴く教師が学校に一人ぐらい居てもいいんじゃないか」と、校長に言い放つ。その頃は自分が組織の中の一人だということをまったく考えず、自分一人で悪戦苦闘しながら生徒たちと関わっていた。

そのような状況の中で、ある女子生徒が分裂病を発病し入院するということが起こった。保健室に休養をもとめて毎日のように来室していたにもかかわらず、何も気づくことができなかった悔恨が、一人よがりということばを自分に投げかけはじめた。それは次第に自分の心の中を大きく占めるようになっていった。

生徒たちは相変わらず毎日大勢保健室にやって来て、その対応に明け暮れる毎日を過ごしているが、心の奥の部分では次第に生徒とかかわることに臆病になっている自分を感じていた。その原因は二つあった。一つは、組織のことを考えざるを得ない年齢になったのにまだ他の教師とじゅうぶん連携がとれていないことであった。あと一つは、生徒がストレートにわたしの中にある本質的部分（葛藤）に迫ってくるのがしんどくて、そこから逃げたかったのである。

このような状況にいた時にスクールカウンセラーと出会い、そしてS男とかかわることになった。

2 事例の経過

S男が保健室を訪れた2年生3月から3年生7月まで、5ヵ月間の経過を4期に分けて報告する。

S男は週に2～3回、多いときは毎日のように保健室に来ていたが、それらすべての回は報告しない。全体の流れをまとめた上で、適宜回を選んで報告したい。

I期：母親の手術、そして退院まで

(3/19；初回)

2年生も最後に迫った3月19日、S男は頭痛を訴えて保健室にやってきた。口もとはチック症状のようにひきつっていた。1時間ほどベッドで休ませると表情は柔らかくなり、S男はソファに座って、水があふれるように一気に話しはじめた。

「母親が昨日癌の手術をした。顔を見ると死にそうな顔をしている。死というものをこんなに身近に感じたことはなかった。母親のことを考え出すと辛くなる」と言ってS男は泣いた。そしてつぎのように続けた。「教室で周りがやかましいと居ても立ってもいられない。友達に母親のことを言っても冗談のようにしか受けとめてくれない。でも教室で暗い顔はできない。ただでさえ根暗だと思われているから。」

<でも、明るくなんかできないよね>と言うと、「うん」と言っただけでうつむいている。<クラスの生徒に話してはどうだろう>と勧めると、「それはできない、みんなが辛い思いをする。先生も辛いやろ」とS男は答えた。

<辛い話だけど、きみの方が辛いだろうし、よく耐えているなあって思う。きみの辛さはわたしは経験していないから分からない。でも辛い気持ちは伝わってくる。何もしてあげられないのが申し訳ないと思う>と言うと、「聴いてもらえるだけでいい。母親に逢いたいけど、逢うのがこわい。どうしたらいいかわからない。何をしても気持ちが重い。喉に骨が刺さった状態だ。寝てしまえば気にならないけれど、気にするとどンドン痛くなる」とS男は答え、その後は沈黙が続いた。

S男の淡々とした話しぶりに比べ、わたしは息ができないくらい自分の心に迫ってくるものを感じていた。どうしてS男の話を聴いてこれほどまでに苦しくなるのだろうか？S男のことをただ単に心配しているだけではない、自分自身のなかにある何かがS男に共鳴しているのを感じた。S男のなかに自分を見ているような、とても落ちつかない感覚であった。わたし

はその感覚を客観的にみることも、明らかにすることもできなかった。

しかしこの後カウンセラーと話をすることで、この感覚の背後には自分と自分の母親との関係がイメージされていることに気づき、そして驚いた。カウンセラーはつぎのように言った。[母親との関係が清算されないまま母親に死なれては困るのだ]。母親に向けた依存、それが満たされないための傷つきと恨み、それらの気持ちが清算されないまま母親に死なれてしまったら、S男もわたしも本当に困ってしまうのだ。カウンセラーとの会話のなかで、わたしはそう感じていた。

(3/30)

「辛い」と訴えて来室。「一人で自転車に乗って病院へ行った。手術後はじめて母親の顔を見た。来てくれないのかと思っていたと言われた。行きたかったけど義父が一緒だとゆっくり話ができないし。<よかったね。お母さんに会えて>。「うん、ホッとした。病院の喫茶店で二人で食事をした。二人きりで食事をしたのはこれが初めてだ」と言うと、S男の表情は和らんだ。そして続けた。「この前外出許可が出て、母さんが家で食事の用意をしてくれた。ぼくも手伝った。味噌汁がおいしかった」「思ったより元気なのでよかった」と言うと、S男は窓の外を見た。外はやわらかな春の日差しだった。「これから病院に行ってみようと思う」と言うと、S男は部屋を出ていった。

4月4日、母親は退院してS男たちのいる家に帰ってきた。

II期：退行する

母親が退院してしばらくすると、S男は「イライラする」と言って来室することが多くなった。それと同時に、わたしはS男から重くまとわりつかれるような雰囲気を感じ、それが重荷になっていった。S男は幼児のような態度で話したり、すねてみせたり、わざと心配をかけるようなことを言ったりする一方で、支配的な態度を見せるようになった。S男が退行してわ

たしを母親代わりにしていることは理解できたが、自身の葛藤が触発される中でS男を受けとめることは、本当にしんどかった。

また、学校という組織のなかで、他の教師にS男のことをどれだけ理解してもらえるかという問題があった。S男は1日のほとんどを保健室で過ごすようになり、そのことを担任や部活の顧問は、何を甘えているんだ、怠けているのではないか、といった思いで見えるようになった。授業にでなかつたり、前向きでなかつたり、努力がみえない生徒を見るとどうしても教師は苛立ちや不安を感じてしまう。責任感からそれらの感情が生じることはわたしもよく分かっていたし、また同じ教師として自分の中にも同様の気持ちはあるので、他の教師にS男のことをどのように伝えたらいいか、わたしは悩んだ。カウンセラーは「これはS男が変わるために必要なプロセス」とたいして気にも留めていない様子であったが、わたし自身は先に書いたようにS男が投げかけてくるものを必死の思いで受け止めていた状態にあったから、カウンセラーほど楽観的にはとてもなれなかった。そのため他の教師に対して自信をもってこれでもいいんです、とはなかなか言えなかった。ただ、カウンセラーのことばが不安な自分を支える拠り所となっていたことは確かである。

S男の担任は男性教師で、やや寡黙な父性的雰囲気をもつ人だった。S男は担任に対し話しづらく感じており、両者のコミュニケーションはうまく取れていなかった。わたし自身もその担任にはすこし話し掛けづらい印象を感じていたが、ある時、保健室にいるS男を担任が大きな声で叱責するのを聞いて、わたしはまるで自分が叱責されているような気持ちになった。そしてますます担任に話し掛けづらくなってしまった。それで、S男のことで話に行っても、固くなってしまって思うように話せなかった。

これまでの自分なら「生徒の話を聞けない担任が悪い!」と攻撃的な鎧を着ることで、そんな自分の傷つき易さや弱さから自分の目をそら

していたが、カウンセラーとの対話のなかでそのことに気づきはじめると鎧を着ることはできなくなってしまった。[がんばって担任の先生と話をして]というカウンセラーの声に押されて担任とコンタクトをつづけているうちに、担任から「S男のこと、男のくせに何をぐちぐち言っているのだろうと思っていた」ということばを聞いた。その率直なことばを聞いて、わたしは担任に親近感を覚えた。そして近づきがたい印象は薄まった。

(4/16)

職員室でいると「先生、保健室」と押し殺した声でS男が言ってきた。表情は固く、目がすどく、目の下には隈ができてるように見えた。すぐに一緒に保健室に向かう。イライラした様子でS男は話しはじめた。会話も途切れがちで、キレルと何をするかわからないといった怖さを感じながらわたしはS男の話を聞いていた。「母親が異常なまでに食事に気を使っている。癌のことで家中がピリピリしている」といった話のあと、S男は母親への否定的な感情を語りはじめた。「小さい頃、母親はヒステリックで、兄が服の着替えにとまどっていると、兄の服をつかんでひっぱりまわした。ぼくも夏休みの宿題が母親のミスで提出できなかったとき、母親に殴られた。鼻血が出て、母親はびっくりしてぼくに謝ったけど、ぼくはそのことが許せない。ぼくは母親に対して恐怖を感じた。母親が怖い。今も怖い」。

(4/18)

1限目、「眠い」と言って保健室に入ってくると、S男はそのままベッドに行き1時間ほど休んだ。その後わたしの後をついて回った。

(4/27)

休み時間ごとに来室する。「弟は何かあるとすぐに母親に言いつけに行く。すると母親はぼくを叱る。小さい頃からそうだ。反抗したいけどできない」。泣き顔になりながら「小さい頃の怖い親のイメージがあって、怖くてできない」とS男は言った。

(5/7)

「今日から母親が仕事に行くようになった。大丈夫だろうかと心配になるけど、普通の生活がすこし戻ってきた。弟が母親におんぶをせがんだりしているのを見ると、母親の身体が大丈夫かと心配になる」。

(5/11)

「部活の顧問の先生から説教された。先生の言うことはもっともなことだ。わかるけどできない。だからぼくはただ返事しかできない」と言って泣く。

(5/12)

他の生徒と話をしている所にS男が寄ってきて「おかん（お母さんの意）、これ見てみ」と言う。とりこんでいたので相手をしないでいると、「あつ、聞いておらん。先生やった」と言う。

(5/13)

食中毒の立ち入り検査で終日忙しく、保健室に居ることができなかった。職員室で居るところにS男が血をポタポタ垂らしながらやってきた。「先生、切った」<どうした？>「カッターで切った」。傷の手当てをしながら保健室でしたんか？>と問うと、「うん、紙を切っていて」とS男は答えた。十分かまってやらないうちで出るとか反省する。

III期：感情の言語化が進む

S男のイライラは続いてきたが、うまく自分の気持ちを言語化できるようになった。家庭でも母親に対して自分の気持ちを伝えるようになる。頭痛や腹痛など身体症状の訴えはなくなり、また保健室への来室も休み時間や放課後に限定されるようになる。

こうしたS男のしっかりした部分を見ることにより、わたしは自分がこれまでS男と本当には向き合っていなかったこと、あるいは逃げようとしていたことにはっきりと気づいた。

(5/22)

「母親に、弟に対して甘いのではないかと意見できた」。

(5/30)

「母親の傷口がまだすっきりしない。すぐに死ぬかもしれないと言ってくると、ぼくはもう嫌でたまらん。そんな時は母親を叱るんだけど」。そう言うと、あとはことばが続かない。

(6/3)

「兄貴はいつも施設のことを言っていて母親を責める。そんなときぼくは兄貴に腹がたつ。あのときは仕方なかったのだから、母親に言っても困らせても仕方がない。デリカシーがない」。<お母さんに対してはどう思う？>と尋ねると、「お母さんは嫌いだ」とあっさり言っている。

(6/4)

「部活の顧問の先生から、大会まで頼むと言われた。ぼくがいると便利だからだろう。大会に出ても1年生に負けるし、そんな時はいやになる」。

(6/11)

「イライラしてキレル自分が不安だ。今日はとくにイライラして仕方がない。母親が癌になってから森林火災のような気持ちでいる。部活や話をしているときは少し収まるけれど、風が吹けば燃え上がる。人とうまく話ができない。だれも自分のことをわかってくれないように思う。何がなんだかわからなくて、頭のなかは真っ白で、今までの自分が前の方に行ってしまう、それをつかもうとするけど、届かなくて、自分がなくなってしまったという感じがする」。そうするとS男は声をあげて泣く。わたしもいっしょに泣いてしまった。

つづけてS男は言う。「父親も母親も家族のことを考えない。家では自分はいい子を演じている。母親はホルモン剤を飲んでるので感情的になっている。兄貴はデリカシーがないから嫌いだし、弟も嫌いだ。タバコを吸ってもイライラしてしかたがない。薬を飲んで楽になるのなら、薬を飲みたい。でもそうすると薬に頼ってしまいそうだ」。S男から病院を紹介してほしいと言われ、わたしは大変な状態になっているのではと心配になってカウンセラーに電話を

かけた。返事は「薬は必要ない。逃げずにあなたが受け止めなさい」ということだった。

(6/15)

「友達がほしい。教室にいてもいやみを言われるし、いっしょに遊んでいた友達からもシカトされるようになった。兄貴からも、お前は嫌われるやつだと言われた。周りが気になって仕方がない。前までぼくは人のことなど気にしなかった。なんて嫌な自分なんだろう。だんだん泥沼に入りこんでいくみたいだ。誰かに引っこ抜いてほしい。なんてぼくはいじけた男なんだろう」。

Ⅳ期：行動化、そして母親との対峙

母親を殴ったり、学校で喫煙して捕まったり、あるいは保健室にやってくる女子生徒たちとつき合うようになったりと、S男は行動面で動きだした。そしてひとりの女子生徒と性関係をもつといった事件を起こしてしまい、職員室は一時騒然となった。しかし、結果的にはこの事件を機にしてS男は母親と対峙し、また自分自身とも対峙し、5ヵ月間にわたる危機を乗り越え成長していった。

(6/16)

「母親が家のなかの用事をしなさいというさく言うので殴ってしまった。母親はそのあと部屋に入って泣いていた。ぼくはイライラしたので、たばこを吸って、酒を飲んで8時に寝た」。

(6/24)

前日学校でたばこを吸っているのを生徒指導の教師に見つかり、この日S男は父親といっしょに生徒指導部で注意をうけた。その後保健室にやってきてS男は険悪な表情でこう語った。「義父は偽善者だ。先生の前とぼくの前では態度がちがう。先生がぼくに、義父に相談するようにと言った。ぼくはその時相談に乗ってください、と言ってしまった」。そう言うとS男はソファを殴りつけた。心配になり<家に帰ったらどうなりそう？>と尋ねると、「殴られるだろう。でもがまんするしかない。そうしないと家を出るしかない」とS男は答えた。

(6/25)

「家に帰ってから頭と腹を蹴られた。義父は先生は何をグチグチ言うとするだろうと腹を立てていた。ぼくはそれを聞いてやはりこの程度の人物だと思った。それから喫煙のことを謝るとき、義父は部のキャプテンを辞退しますと言え、とぼくに言った。その方が男らしくてかっこういいだろうということだった。やめることは簡単だけど、逃げることにしかならないだろうとぼくは思った。義父の考えはおかしい。」

(7/2)

「最近義父がよく殴ってくるようになった。イライラする。身体は痛くないけど、心が痛い。」

(7/6)

朝保健室でひとりの女子生徒から大変なことを聞かされる。S男が彼女たち、保健室で知り合った数人の女子生徒といっしょに酒を飲み、そのうちの一人と性関係を持ったというのだ。話を聞くと一方的な性関係ではない。しかし、その時のS男は酒に酔って怖かったという。わたしはそれを聞いていらいだつ感情を抑えることができなかった。わたしは強い口調で「女性は道具ではない」とS男に言った。S男は身体をちぢこませガタガタと震えだした。そして持っていたライターを壊して液体ガスを自分の手にかけた。その日は夜遅くまでS男と話をした。自殺するのではないかという不安やカッとなって何をするかわからない怖さをわたしは感じていた。でもここで逃げたらだめだ、崖っぶちの所で踏ん張らなければと覚悟を決めてS男と向き合った。

崖っぶちとわたしが感じたのは、あとひとつ他の教師からわたしに向けられる非難を想像したからでもあろう。保健室を火種として事件をおこしてしまったと見られることの恐怖である。本人たちのプライバシーを守らなければいけないのではないのか？このままにしておくことが本当にこの子たちのためになるのか？報告すると緊急会議など担任や学年に大きな迷惑をかけてしまう、当然わたしに対する風当たりも強

くなるだろう、いったい生徒たちはなぜわたしにこの話をしたのか？性をどのように考えればいいのか？等々、わたしの頭の中は混乱した。そして、ともかく、自分だけではとても抱えられないと感じていた。

(7/7)

朝からわたしの身体は下痢症状を訴えていた。まず誰に報告したらいいのか？それとも報告を明日まで延ばそうか？わたしは迷いに迷っていた。校長に相談しようと、書類のはんこをもらう顔をして校長室に行くが留守だった。職員室にもどると教頭の顔が見えた。事態を報告した。学年会では事態の説明だけして、あとは学年会に任せるよう言われた。やはり、厳しい態度であった。学年会で説明をしているときは針の筵に座っている思いであった。(あとでそのことを校長に話すと、どうしてそんな風にとるのか、と叱られてしまった。)報告を終えしばらくの間落ち込んだが、しかし自分だけでは抱えられないと感じていたので、どこかにホッとした思いもあった。

その後S男たちには「先生ひとりの胸に納めておくには問題が大きすぎる。担任に話をしようと思う」と告げた。放課後S男は自分の口から事態を学年主任に説明した。

夕刻、母親が学校に到着する。S男は母親に対して自分から事態を説明した。母親は混乱している様子であった。

(7/8)

教育相談委員会でスクールカウンセラーが事件の背後にあるS男の心理的な問題とその経緯を説明した。S男が一見悪くなっているように見えるのはS男が変わるために必要なプロセスであることを述べ、動揺もあってうまく説明できないわたしを援護してくれた。

放課後、母親にもう一度来てもらい、母親、S男、スクールカウンセラー、わたしの4人で話をした。主にスクールカウンセラーが母親とS男の間の橋渡し役をし、わたしは横でその様子を見守っていた。母親にうまく話が通じない

とS男はイライラして途中部屋を出ていったりした。緊迫した状態のなかで両者は対峙した。

S男は、これまで母親が義父の側について自分たちの側についてくれなかったこと、暴言や暴力などを止めてくれなかったことを非難した。これに対し母親は、努力はしていたがそれが足りなかったかもしれないことを率直に認め、カウンセラーの提言を受けて、もう一度義父に対して話をしてみることを約束する。

S男はさらにつづけて「どうしてあんな男と結婚したのか!」と母親に迫った。母親は戸惑いながらも、なんとかそれに答えようとしていた。(7/9)

部活の顧問がS男に対して厳しく指導する。「3回ほど泣いた。自分は弱い人間だ。これからどうして行ったらいいか分からない」とS男は言った。

この後わたしは部活の顧問と話をした。顧問は体育の男性教師で、身体ごとぶつかって指導するタイプのひとである。はじめの頃わたしは彼に対して話にくい思いを抱いていたが、S男以外にも彼の担任するクラスの女子生徒が保健室に来ていることで、話をする機会が増え、次第にわたしは彼の中に厳しさの中にあるやさしさを感じるようになっていた。この日彼はわたしにこう語った。

「S男に保健室に行くと言ったら、S男はそれはできないと言った。養護の先生に心配をかけると言った。そしたらS男は自分は弱い人間でどうしていけばいいか分からないと言って泣いた。あんなS男を見たのははじめてだ。先生、いろいろありがとう」と言うと、彼は目に涙を浮かべた。わたしと彼とS男の3人が深くつながりあったことを感じた。

(7/10)

今回の事件の場に居て、酔ったS男から迫られかけたN子がS男に宛てて書いた手紙をS男に見せる。N子は保健室登校をしている姉御肌の非行傾向の女子生徒である。S男は事件

のあとN子の気持ちをずっと気にしていた。手紙にはつぎのように書いてあった。

『つぐなうって言われても、今さらなんやっで感じなんやけど、あんたはどうしたいん?ぼうずにして来いって言われてできるのか?つぐないとして次のことをしろ。ぼうずにして来い、たばこと酒をやめろ、制服をきちんとしろ、保健室に来るのはだめ。私が一番いやだったのは、私が「鑑別所に入れられる」っていった時の、あんたの態度。人のことは気にせんと自分だけ助かりたいって顔しとった。みんな今回のことで頭のなかいっぱいだけど、みんな助け合った。慰め合った。でもあんたは違った。うちは、自分だけって顔する人、大嫌いだ。あんたのために、どれだけあんたのことを思っている人が傷ついたと思う。他の人から見たら最低やよ。失った信用は二度とかえってこんよ。だから一人でも多くの人に信用されるようにしてほしい。今のあんたは誰にも好かれんよ。だから好かれるような人になれ。結構たいへんかもしれん。でも乗り越えてこそ好かれるんじゃない。がんばってみろ』。

S男はつぎのような書置きをわたしの机の上に残した。

「N子さん、手紙を読んで思ったことは、自分がとてつもなく情けなく、心の弱い男だということだ。手紙の返事は、いまの自分にはとても書けない。だから今はN子さんに言われた、服か頭か酒かたばこのことから直して、授業にも出て、保健室にも行かない。こういうことは言葉、字で表すことはとても簡単だ。だが自分は本当にこのことの責任はとりたい。だからぜったい弱い自分をなくして、面と向かって自分の気持ちをN子さんたちに言える男に、心からなりたい」。

(7/15)

S男と母親、カウンセラーとわたしの4人で面接。

席につくとS男は机の上に足を投げ出した。「何!その態度は」という厳しい母親の口

調に、S男は「負けた」と言いながら足をおろす。母親は言った。「わたしの気持ちをわかってくれたようで、家にいるときはとても素直にわたしの話を聞いてくれる。わたしがどんな思いで生きてきたかということも、この子がわたしの手から飛び立たないうちにいろいろと話しておきたい」。母親との和解をS男は望んでいるはずだが、まだこう言われると落ち着かない気持ちになるのであろう。S男は嫌悪感を示しながら「家でおとなしくしていないと、母さんはどんな態度になるのだ」と切り返した。母親はS男を虐待してきたことを認め、自分自身も母親から虐待を受けたことを話した。

(7/17)

「母親と一緒にカウンセリングを受けると、家に帰ってから母親が変になる。ビールを飲みながらピーナッツの皮を投げて来たり、先生に施設の話はしてほしくなかった、わたしの方が部屋から飛び出したかったと言う。だから何もしないほうがいいかもしれない」とS男は言った。前回自分自身のことを話した母親は、どのように自分の気持ちを収めたらいいか戸惑っているのであろうと思われた。

(7/22)

S男と母親、カウンセラーとわたしの4人で面接。

1週間の間にあった家でのやりとりについて、S男は自分の気持ちを母親に話した。母親はその一つ一つを真剣に聴き、自分の気持ちを伝え返した。そして「S男から離婚するように言われたが、夫といっしょに頑張ってここまで生活を築き上げてきたことを考えるとそれはできない」と、S男に対してははっきりと答えた。この回はS男も母親も自然な態度で互いに向き合い、会話は進んでいった。

最後に母親は穏やかな表情でS男に向けてこう言った。「こんなに真剣にS男と関わったことはなかった。S男を愛しく思っている。父親のことは今後わたしに任せて、あなたは勉強に集中してほしい」。

(その後の経過)

2学期からS男が保健室に顔を見せることはなかった。ローカで会うS男の表情はずいぶん穏やかになっていた。勉強に励み、希望する高校にも合格した。卒業式の日S男は職員室までやって来て世話になった教師たちに礼を言った。そしてJ中学の門を巣立って行った。

III 考 察

まず1) S男の経過について考察し、そのあとつぎの3点を考察したい。2) 教師のコンサルタントとしてのスクールカウンセラー、3) 受容と指導、4) 養護教諭と他の教師の連携、についてである。

1 S男の経過について

S男の経過を4期に分け、それぞれの期にはつぎのような主題をつけた。I期：母親の手術、そして退院まで、II期：退行する、III期：感情の言語化が進む、IV期：行動化、そして母親との対峙、である。これらの主題に若干の説明をつけ加えてS男の経過を以下に考察したい。

母親に向けた依存、それが満たされないための傷つきと恨み。これらの気持ちが清算されないままもし母親が死ねばS男は後悔の念で途方に暮れてしまうだろう。母親の手術の翌日保健室を訪れたS男は、話しぶりは淡々としていたがきつと途方に暮れていたにちがいない。養護教諭が息もできない思いでS男の話を聴いたのは、淡々としたS男の様子の中に本人のどうしようもない不安を感じとったからであろう。だが幸いなことに、術後の経過は順調で母親は無事家に帰ってきた。そして、不安は勿論残るものの、日常の生活がS男に戻ってきた。ここまでが「I期：母親の手術、そして退院まで」の経過である。

母親が退院してしばらくすると、S男は「イライラする」と言って来室することが多くなる。それと並行してS男は養護教諭に幼児の

ような態度で話したり、すねてみせたり、わざと心配をかけるようなことを言ったり、あるいは支配的な態度を見せるようになった。そのため養護教諭は、自身の葛藤も触発されるなか、たいへんしんどい思いをしてS男を受けとめなければならなくなる。かなり退行した状態での転移が養護教諭に向けられたと理解することができる。だが、ここで、S男は養護教諭に母親の代わりに求めたのだと言い切ってしまうと理解が誤る恐れがある。なぜならS男は自分のなかの「イライラする」気持ちをことばで表せないぶん、行動で示したと理解することもできるからである。言い換えれば、この期は淡々としたS男の内部にある感情が、退行・転移状況をとおして掘り起こされ耕されたと理解することができる。以上が「Ⅱ期：退行する」の経過理解である。

そして「Ⅲ期：感情の言語化が進む」へと展開する。S男は自分の気持ちを言語化し情緒をコントロールする力をつけてくる。頭痛や腹痛など身体症状の訴えがなくなり、また保健室への来室も休み時間や放課後に限定されるようになったのは、その成果であろう。そしてS男は母親に対して自分の気持ちを伝えるようになる。いよいよ母親との関係修復が具体的段階に入ったのである。

ただ、S男はこのあと言語的チャンネルだけで母親との関係を修復していったのではない。Ⅳ期に入るとS男は母親を殴ったり、学校で喫煙して捕まったり、ついには性行動事件と、行動化をつづけておこした。ここには「まじめな、おとなしい生徒でナイフを持っている生徒がいる。こんな生徒があぶない」と教頭が言った2年時のS男ではなく、はっきりと「悪い子」になったS男がいる。というより、S男は強くなったのである。だからこそ、性行動事件のあとおこなわれた合同面接で、S男は母親と正面から対峙しついに関係を修復することができたと考えられる。

2 教師のコンサルタントとしてのスクールカウンセラー

スクールカウンセラー活用調査研究は、文部省が任意の学校を指定してスクールカウンセラーを派遣する制度であり、職員会議での自主的な決定によって導入されるものではない。そのため、学校に部外者であるスクールカウンセラーを導入することに関しては、J中学のように、絶対反対という意見は少ないにせよ抵抗感を示す教師がいるのは当然のことである。問題は、派遣されたスクールカウンセラーが如何にカウンセリングを教師たちにセールスしていくかという点にある。

スクールカウンセラーの仕事は大きく分けるとつぎの3点がある。a) 生徒本人の援助、b) 保護者に対する援助、c) 教師に対するコンサルテーション、である。スクールカウンセラーの専門制度が確立しスクールカウンセラーと教師の分業が明確な米国などと比べると、現在の日本のスクールカウンセラー派遣制度では村山(1992)も指摘するように、c)の教師に対するコンサルテーションが中心課題となる。スクールカウンセラーがでしゃばってコンサルテーションを押し売りするのは論外だが、買い手がくるのをただ待つだけの受身の姿勢では、学校という組織全体を視野に入れたとき大きな力をもたない。さまざまな個性、パーソナリティをもつ教師集団のなかに積極的に入っていきカウンセリングをセールスするには、相応の人格的度量がカウンセラーに要求される。本スクールカウンセラーが緊張した面持ちでJ中学の門をくぐったのは、はじめての経験ということ以外に、自身の人格的度量が問われる予感を感じていたからであろう。

近藤(1995)はカウンセラーにとってスクールカウンセリングを経験することがひとつの試練となることを、つぎのように述べている。“学校という、子どもが生活している場、問題が起こっている場のまっただなかで、しかも学校スタッフとして働くときには、子どもの生活の場

とは離れた場での相談活動を支えていたいくつかの原理、つまり、カウンセラーが働く場と子どもの現実生活の場との間に存在した一定の距離、それによって保証されていたカウンセラーの匿名性や中立性や非個人性、あるいはクライアントとカウンセラーが出会う面接室という場の虚構性が、喪われ、脅かされ、壊されるという重大な変化が生まれ、これに応じてわれわれ自身が依って立つ基本的なスタンスの変換や見直しが迫られるのである”(Pp. 17)。これはカウンセラーと生徒の関係について述べているが、そのままカウンセラーと教師の関係に置き換えることもできる。つまり、スクールカウンセラーは学校という「現実の人間関係」の場において「生身の自分」で勝負しなければならないということである。

場所が面接室から学校現場に変わったからといってカウンセラーが身につけた応答技術や話されたことを深く理解する力が喪われてしまうわけでは勿論ないし、これらが役に立たなくなるのでもない。ただ、これらの力は安定した感情状態があってはじめて有効に働きはじめる力である。面接室においてカウンセラーの安定した感情状態をゆるがすものは、転移、逆転移として概念化されている。これらはカウンセラーの人格的側面に関わる事柄である。転移を受け容れ、逆転移を克服することがカウンセリングを修練する上でもっとも難しい問題だと筆者は考えている。時間、料金、場所、治療者と被治療者の関係性などが設定された通常のカウンセリング構造は、ある側面から見ると、転移、逆転移をすこしでも取り扱いやすくするために作られているとも言える。先に述べた、スクールカウンセラーは「生身の自分」で勝負しなければならないということは、言い換えると、治療構造のないところで生身のパーソナリティで転移、逆転移を取り扱わなければならないということである。

本事例では養護教諭がまさしく生身のパーソナリティで転移、逆転移と正面から向き合っ

ていたが、それに比べるとスクールカウンセラーのその姿勢は弱い。それが教師集団全体に対するコンサルタントとしての役割を果たせなかったひとつの大きな原因であると考えられる。

3 受容と指導

本事例でもみられたように、学校がカウンセリングを取り入れるとき「受容か、指導か」の対立がしばしば生じる。これは、教育の基本理念、あるいは教師の基本姿勢に関わる重要問題であるからだろうが、筆者は受容と指導は元来対立すべきものではないと考えている。

不要な対立を避けるにはまず用語を定義しておく必要がある。受容については、カウンセリングに必要なつぎの3つの要素を意味するものとして定義したい。a) 話を聴く技術、b) 話されたことを深く理解する力、c) 転移や逆転移を取り扱える人格的度量、である。指導については、“人間が健康にあるいはより良く生きていくためには、成長途上にある子どもたちにとって何を身につけておくことがもっとも大切か、彼らの中に何をもっとも育てておきたいか、という人間観と教育観にもとづいて、その目標を達成すべく、ある特定の方向に子どもを方向づける働きかけ”(近藤, 1994) と定義しておきたい。

さて、“学校にカウンセリングが定着しにくい第一の理由は、カウンセリングが教師が考えているほど簡単に行えるものではないことである”と東山・藪添(1992)が述べているように、カウンセリングを習得することはそうたやすいことではない。特にc)の人格的度量に関しては、本事例の養護教諭の例が示すように、情緒的危機をくぐり抜けなければ身につかないような課題である。総じて学校現場では、本物の受容をよく理解せずに「受容など役に立たない」と批判している場合が多いように思われる。

一方、カウンセリングの教科書に指導の仕方が書かれてあることはまずない。むしろアドバイスや指導などをしてはならないと書かれてあ

る場合も多いかと思われる。精確にいうとこの文言には「相手の気持ちをしっかりと受容せずに」という但し書きがつくが、ともあれカウンセリングにおいて指導が積極的に取り扱われることがないのは確かである。クライアントの内面の探求ということを第一義に掲げれば、そのために別の側面で限界が生じるか否かは別として、これが当然の帰結なのである。このような状況のため、カウンセリング推進派の教師は指導の見本をカウンセリングの分野で見出せないまま、受容のみに固執してしまう傾向があるのではないかと推測する。

ところで臨床心理学者の河合 (1995) は教育について論じた著書「臨床教育学入門」のなかで、「抑止力」の必要性についてつぎのように述べている。“思春期の変革は人間の心の底の方から行われるので、それが表面に行動として出てくるときは、本人もとめることができない。暴力などをふるい出すと、自分でもどうしようもなくエスカレートしてくる。そんなときは、それを誰かがピツリととめてやらねばならない。そのときに大切なことは、生半可の態度にならず、ここからは絶対にだめという線を確実に示すことである。思春期の子どもの気持ちがわかるとか、いいかげんにしなさいよ、などというのではなく、きっぱりとした態度でのぞまねばならない”(Pp. 131-132)。また、校長として荒れた中学を再生させた塩野入 (1993) は、つぱりの生徒たちに対してみごとな受容をおこないながら (著者本人は受容ということばを使っておらず、またいわゆるカウンセリングマインドには限界があると述べているが)、一方で対教師暴力に対しては出席停止措置という断固とした態度でのぞんでいる。

ここまで議論を進めてきて明らかになったことは、「指導」という用語の定義には「きっぱりとした抑止力」の意味を加えなければならないということである。

S男が起こした性行動事件の場合も、部活顧問をはじめ教師たちは断固とした態度で指導し

ている。養護教諭は他の教師に事件を知らせるかどうかで一時迷ったが、「生徒の秘密の守秘義務」などということばで判断を誤らせなくてよかったと思う。(そもそも、当事者の生徒たちが養護教諭に事件をつげたのは、止めてほしかったのだと考えられる。)

なお、厳しい態度という点ではN子がS男に宛てた手紙もそうである。これがどれだけ有効に働いたかはS男の返事をみれば明らかである。そして、養護教諭はこのことを通して改めて生徒同志の援助し合う力のすごさを認識した。

4 養護教諭と他の教師の連携

担任から生徒の教育相談を頼まれて養護教諭が生徒と関わりはじめる場合もあるだろうが、多くの場合は養護教諭が最初に生徒から相談を受け、そのあと他の教師との協力体制をつくっていくことになる。しかし、養護教諭は学校内において一人職種であるため他の教師から十分な理解を得られていないと感じ、他の教師との連携を進めること自体が養護教諭のストレスとなっている場合がある(岡村, 1991; 鈴木ほか, 1994)。

だが一方、養護教諭と他の教師の連携は概ね良好であることを示す研究(油布・菊竹, 1993)や、養護教諭は臆せず積極的にイニチアシブをとっていけばいいのだという意見(田上, 1997)もあり、養護教諭は他の教師と連携をとりにくい状況にいと一般化して述べることはできない。むしろ人間関係に軋轢のない組織など想像しがたいように、養護教諭が他の教師との連携でストレスを感じるがあっても、それはどの人間関係にも不可避免的に存在する問題なのだと理解することもできる。本事例の養護教諭が感じていた他の教師との連携の難しさもそのように理解したい。

人間関係を歪めるものは互いの人格がもつ葛藤であることはカウンセリング、とくに精神分析が掲げる基本命題である(萱原, 1998)。そし

て葛藤は誰もがもつ。本事例において養護教諭が感じていた他の教師との連携の難しさも、どちらか一方だけの問題に帰すことはできないだろう。といて、相手の問題だけをあげつらっているうちは自分自身が救われない。それは本養護教諭が反省しているとおりでである。S男との関係、他の教師との連携、この二つのプロセスのなかで本養護教諭は自己分析にいどんだ。以下、養護教諭自身の感想を述べて、この項を締めくくりたい。

「日常生活は何もないような顔をして生活しているが、わたしの心のなかは晴れていることが少なく、自分の感情をうまく感じられないこともあった。しかし、もがきながらもほんとうの自分を生きようとするS男と関わりながら、わたしは自分に対するごまかしの衣を脱いでほんとうの自分自身と関わるができるようになっていった。その過程で生じたさまざまな思い、ときには他者に対する激しい怒りなどすべてをこの論文に記述することはしなかった。ので、つぎのような結論を述べても読者には実感として伝わりにくい面もあると思うが、自分自身に対するひとつの区切りとして記しておきたい。

いまでもわたしの自己概念はネガティブな側面がつよく、そのため生きづらい思いを感じることがあるのだが、一方でそれは他者との共感を深める長所にもなっていると考えることができるようになった。自己肯定感をもてることで他者に対する恐れは薄れ、ありのままにつき合える自分のイメージが育ちつつある。時間をかけて自分を好きになることで人とのつき合い方も変わってくる。このことに気づいたことはこ

の2年間で得たわたしの大切な宝物である。無理をせずこれから一人ひとりの教師とより良い人間関係を築いていくことができればいいなあと思っている」。

文 献

- 東山紘久・藪添隆一 1992 学校カウンセリングの実際 創元社
- 河合隼雄 1995 臨床教育学入門 岩波書店
- 萱原道春 1998 生徒との関係を歪める教師のもつ対人関係の葛藤 金沢大学教育学部附属教育実践研究指導センター 教育工学研究, 24, 25-37.
- 近藤邦夫 1994 教師と子どもの関係づくり 東京大学出版会
- 近藤邦夫 1995 スクールカウンセラーと学校臨床心理学 村山正治・山本和郎(編) スクールカウンセラー ミネルヴァ書房 Pp. 12-26.
- 村山正治 1992 カウンセリングと教育 ナカニシヤ出版
- 岡村達也 1991 思春期の不登校生徒と生きる視覚：ある養護教諭の実践から、学校現場におけるかかわりの留意点を考える 専修人文論集, 48, 99-125.
- 塩野入靖夫 1993 教師が変われば生徒が変わる クレスト社
- 鈴木邦治・別惣淳二・岡東壽隆 1994 学校経営と養護教諭の職務II 広島大学教育学部紀要(第一部 教育学), 43, 153-163.
- 田上純子 1997 思春期の不安を取り除く養護教諭の役割 児童心理, 51(3), 105-111.
- 油布佐和子・菊竹美里 1993 養護教諭の教職生活 福岡教育大学紀要(第4分冊), 42, 215-233.